4. 出土遺物について

出土遺物で注目されるのは、A区北西部で多量に出土した19世紀を中心とする陶磁器である。肥前・瀬戸美濃を中心とする磁器碗、越中瀬戸・越中丸山・小杉など在地系の陶器碗が多く、喫茶用の茶碗とみられる。上部から流れてきた流土層に多く含まれ、江戸時代の「峠茶屋」の地名が示すとおり、尾根上の峠に茶屋があったことがうかがえる。江戸時代後期に描かれたとみられる「越中富山船橋景」（第5図）や絵馬「明神山七面参詣図」では、茶屋は峠に至る坂道の脇に描かれ、尾根上の峠には見られないが、出土遺物から19世紀前半頃には峠部分にも存在していたことがわかる。なお、天保9年（1838）「廻国御巡見御通行役懸り等留帳」には、「峠茶屋」に餅店4軒、酒店2軒、草履店、草鞋店があったことが記されている。また、峠近くには「アメヤ」や「マンジュウヤ」などを屋号とする家がある（呉羽山観光協会2009）ことも茶屋の存在を裏付ける。

陶磁器には文字を書いた資料が30点以上認められる。多いのは、焼き継ぎ修理した磁器の高台内に朱墨で書かれた文字である。「峠伊平」、「峠安兵衛」、「峠茶屋ヵ嘉右衛門」といった人名のほか、「峠茶や」、「峠」といった地名を表すものがある。「峠伊平」は4点出土している。全体的に「峠」を記すものが多い。焼き継ぎを依頼した峠茶屋の依頼主あるいはその地名を書いたのであろう。限られた調査地点において相当数の資料が出土していることから、複数の茶屋が、まとまった量の茶碗の焼き継ぎを依頼していた様子がうかがえる。

文字資料としてもう1点注目されるのは、硯（第21図39）に彫られた「上々高田石　たつ」の銘である。「高田石」は岡山県真庭市勝山地域で産出される高田石を意味する可能性が高い。高田石は黒色の粘板岩で、そこで作られる硯は室町時代以来の伝統があるとされる。硯の流通を物語る貴重な資料といえる。

瓦は、陶磁器と同じく上方から流れてきた流土や表土を中心に、近世の燻し瓦と近代の釉薬瓦が出土している。燻し瓦の量はあまり多くなく、茶屋に葺かれていたものか不明である。富山藩の丁子梅鉢文を入れた軒桟瓦が1点出土している。この瓦が使われた富山藩関係の建物としては、二代藩主前田正甫が建立し、五代藩主利幸が藩主の祈願所とした長久院や、万治年間に富山藩士奥村蔵人が建立した七面宮が考えられる。前者は本調査区から尾根を挟んだ南西側の中腹にあったとみられ、可能性は低い。七面宮は本調査区の西上方、稲荷社前の広場に存在したとの推定があり、この瓦かもしれない。一方、近代の釉薬瓦は、北上方の尾根頂部付近にあった近代の「八田瓦」窯場から転落したものであろう。窯道具である栓ころや長棒が出土しているほか、窯の壁体に使った可能性がある焼けた塼もある。周辺の地表面にも同じ遺物が多く散乱していた。（野垣）

第2節　明神山・五時谷における近世北陸道と周辺遺構

1. はじめに

本調査区周辺は近世北陸道のルートにあたるとともに、近世富山の風光明媚な名所として複数の寺社が建てられ、参詣道も整備された。現在でも複数の道跡や建物跡、造成面、各種の石造物が現地で確認できる（武内2007a・b、古川2012・2020、西井ほか2018）。ただ、それらの比定地や道の性格については未解明な部分も多く、論者によって見解の一致をみていない。

本節ではこれまでの研究を参照し、今回の発掘成果と絡めながら北陸道のルート変更や建造物の比定について検討を行う。

2. 近世北陸道の「付替」について

今回発掘調査を行った近世北陸道の峠道ルートについては、寛政 10 年（1798）頃に付け替えられたものという重要な指摘を武内淑子氏が行っている（武内 2007a・b）。根拠とされたのは、天保 9 年（1838）の『廻國御巡見留帙』にある「右大坂峠急ニ付往来人難儀および候故寛政十年之頃富山吉沢屋宇兵衛執持御郡役所より人足手傳右道付替ニ相成申候當年まて四十年斗ニ相成申候」の記述である。大坂峠が急で往来に難儀したため、寛政 10 年頃に富山の吉沢屋宇兵衛の執り持ちで、郡役所より人足が手伝い、道を付け替えた、という内容である。武内氏はこれを北陸道の付け替えと指摘するのに対し、古川知明氏は「大坂」は北陸道ではなく、七面宮参詣道とされている（古川 2020）。この点は今回の発掘調査成果の評価にも関わるため、検証しておきたい。結論からいうと筆者は北陸道の可能性が高いと考える。理由は次のとおりである。

- 『廻國御巡見留帙』には、七面宮の位置を示す部分で、「五時谷七面宮坂之上に御座候」の記述がある。この「坂」と「大坂」は区別されており、とするなら「坂」が七面宮参詣道で、「大坂」は北陸道に対応すると考えられる。
- 直接的な根拠ではないが、「大坂」の呼称は、「大道」（「越中道記」（正保 4 年（1647））や「大路」（石黒信由著「増補大路水経」天保 7 年（1836））である北陸道の坂という意味とも考えられる。
- 近世北陸道の呉羽丘陵越えの峠道は、「安養坊坂」や「紅葉坂」と呼ばれた。寛政 10 年より前の史料である「越中道記」（正保 4 年）、「延宝越中国絵図」（延宝 6 年（1678））、「北陸道中記」（明暦 3 ～享保 12 年（1657 ～ 1727））はいずれも「安養坊坂」なのに対し、寛政 10 年より後の「越中古実記」（文化 7 年（1810））は「紅葉坂」と呼称が変わっており、寛政 10 年頃に北陸道が別地点に付け替えられたことと整合する。
- 北陸道の峠道の坂の長さについて、「越中道記」（正保 4 年）は 3 町（327m）、「立山遊記」（天保 15 年（1844））は 2 町（218m）と記す。2 町は現ルートの東麓から峠までの距離に近い。どこからを坂とみなしたか、測量方法の誤差などが考慮されるにしても、両者の違いは大きく、やはり付け替えがあったことを裏付ける。

以上のとおり、寛政 10 年の前後で史料にある北陸道の坂の呼称や長さが変わっており、付け替えがあったと考える。したがって、寛政 10 年頃の前と後でルートは分けて考える必要があり、今回発掘調査を行ったのは、付け替え後のルートということになる。

これによって発掘調査成果をみると、上層道路は出土遺物から 19 世紀に比定することができ、史料の記載と整合する。下層道路は出土遺物が少なく、直接的な時期比定は難しいが、18 世紀以前の遺物が相対的に少量であることを考慮すると、下層も大きく遡らない時期を想定でき、寛政 10 年頃以降とみて問題ないと思われる。なお、発掘調査で確認した下層から上層道路への造り変え、あるいは上層道路でみられた側溝の掘り直しによる路面の移動を、史料にある「付替」とみる向きもあるかもしれないが、同文献では「右道付替後一両年過而古道跡え之下タ之茶屋壱軒相建申候…」とあり、新旧の道は明らかに別の道とみなされていることから否定できる。

それでは付け替え前、近世中期以前の北陸道はどこを通っていたか。この点も上記の問題に関連して武内氏と古川氏による異なる説がある。武内氏は近世後期ルート（発掘調査地を含む現ルート）より南西側の尾根筋を想定し、古川氏は北東側の谷筋、現在の主要地方道富山高岡線に重なるルートを指摘している（第 45 図）。武内氏のいう南西側の尾根筋ルートは、「越中道記」に記された 3 町（327m）という坂の長さにほぼ一致する。また、地形をみると、坂の勾配は付け替え後の現ルートより急だったと推測され、『廻國御巡見留帙』にある坂が急なため付け替えたという記述とも整合する。射水市

永森神社蔵の絵馬「明神山七面参詣図」には、右側に近世後期の北陸道とみられる道、左側に七面宮参詣道があり、多くの人が行き交う様子が描かれるが、両道の間の尾根筋に人がいない道があって、途中で途切れている。武内氏のルートとすれば、この道が付け替え前、近世中期以前の北陸道の名残かもしれない。一方、古川氏の指摘する北東側の谷筋ルートは、周辺では最も比高差がないことや、直線性が意図されたという主要街道の性格（古川 2020）を考えると、ここに道を通した可能性も十分考えられる。今後の課題であろう。

3. 近世後期における明神山・五時谷周辺の遺構

最後に近世後期における明神山・五時谷周辺の北陸道と寺社等の復元案を示す（第 45 図）。武内 2007a・b、古川 2012・2020、西井ほか 2018 を参照しつつ推定を行ったもので、2 案がある。

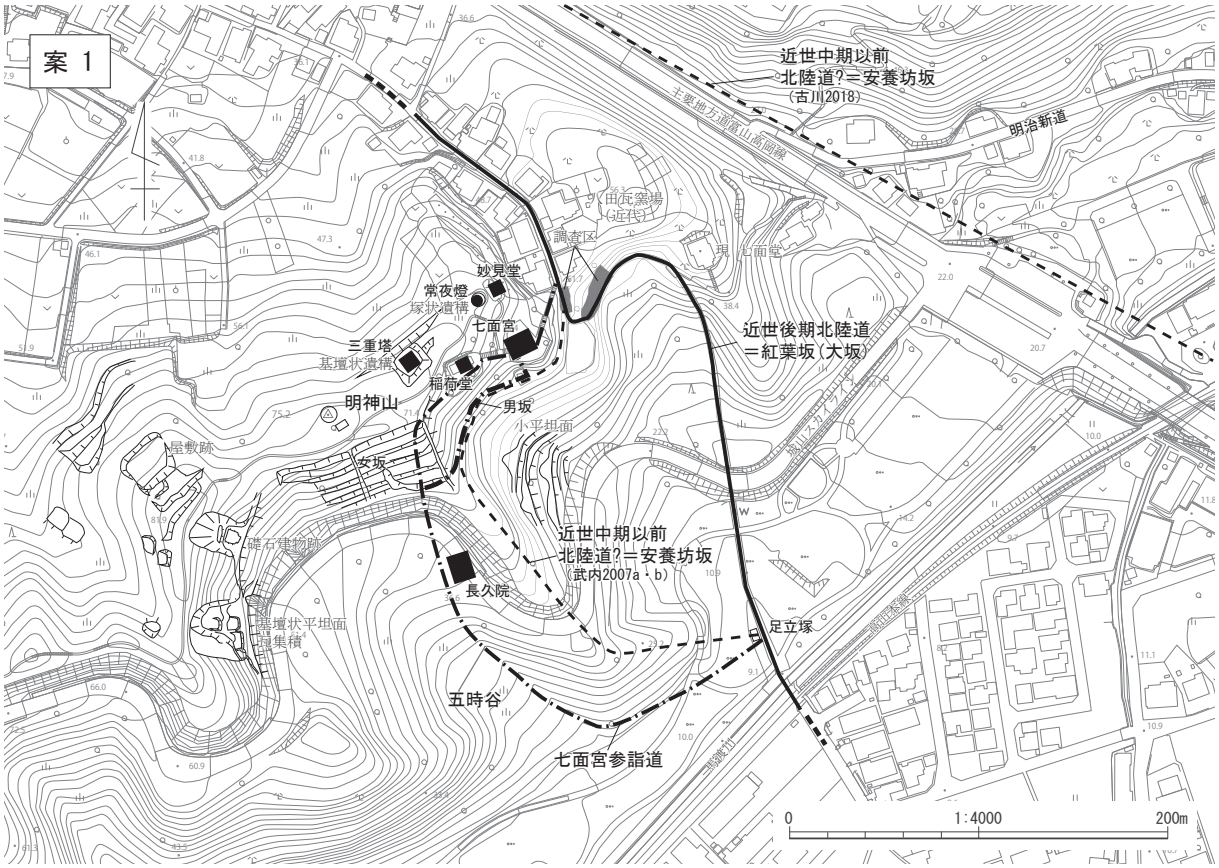
案 1 は、七面宮の位置を、従来考えられているとおり、現在の稲荷社前の広場に置くものである。七面宮参詣道は、近世後期絵図によると北陸道から山を挟んだ西側の谷筋を通ることから、ここが妥当であろう。この参詣道が通るのが五時谷である。七面宮参詣道は、途中「男坂」と「女坂」に分かれるが、この案では両坂が現地でどのように比定されるか特定できず、大雑把な図示である。長久院は、絵図では七面宮参詣道の右脇に描かれることから推定した。「明神山の中腹五時谷に」建立されたとする記述（小柴 1913）とも合致する。現在は車道が敷設されているため痕跡はない。このすぐ北東にある小平坦面遺構が長久院跡地かとも思われたが、参詣道から尾根を挟んで離れることになり、可能性は低い。妙見堂は、絵図では北陸道の左側（西側）に描かれる。武内淑子氏のご教示からもこの辺りが候補となる。昭和 21・27 年の航空写真ではここに隅丸方形状の区画が認められ、妙見堂跡地の可能性がある。七面宮、稲荷堂、常夜燈、三重塔の推定地は、武内 2007a・b、古川 2020 から比定した。常夜燈跡地は塚状遺構が、三重塔跡地は基壇状遺構が残る。

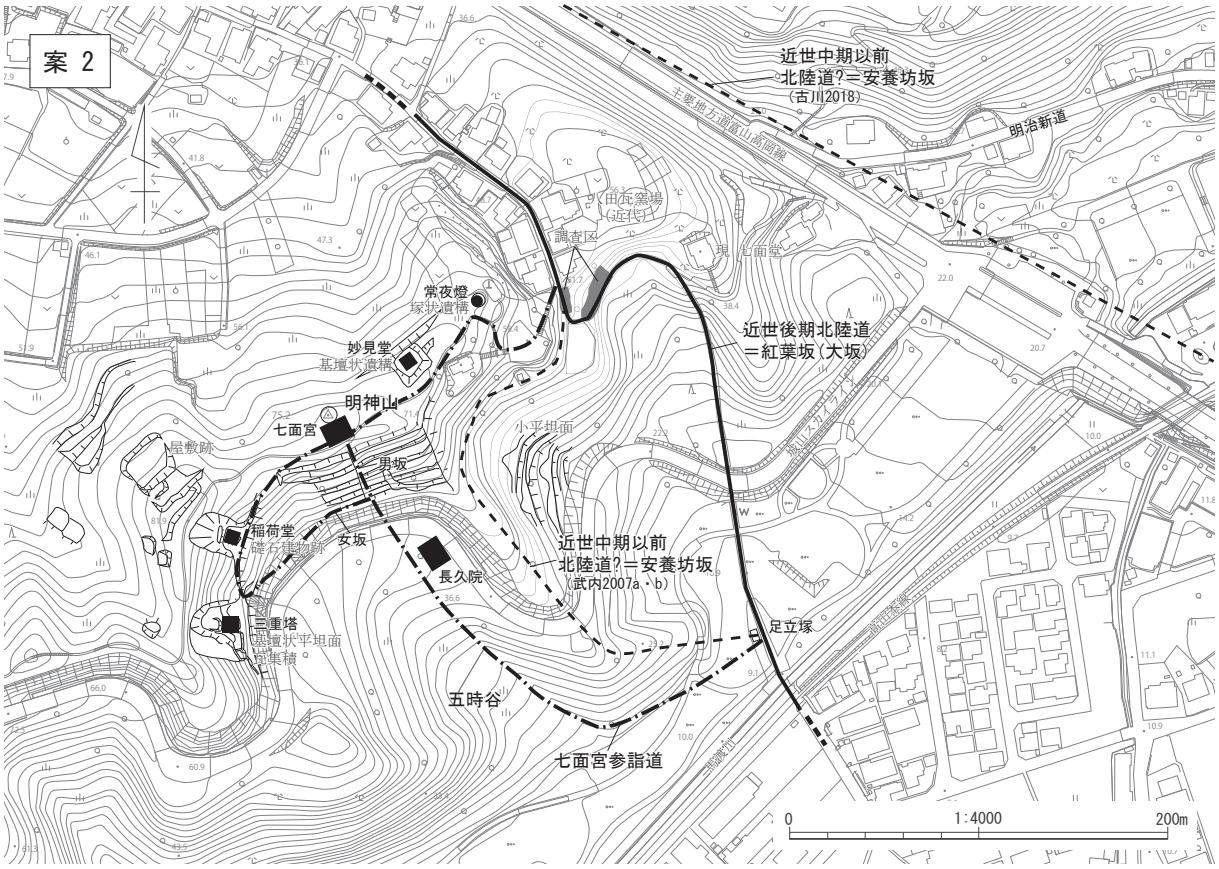
案 2 は、七面宮を西側の尾根上に置く案である。案 1 の七面宮比定地は平坦面が狭く、庫裡、神門などを含む施設をすべて配置できるかという疑問に端を発する。七面宮が案 1 の場所に推定されているのは、現存する稲荷社との位置関係による部分もあると思うが、そうした前提を一端取り去り、現地で確認される遺構と絵図の記載を重視した。この場合、五時谷の西側で確認されている礎石建物跡と基壇状平坦面がそれぞれ稲荷堂、三重塔に比定でき、七面宮は尾根上の三角点付近の平坦面に置ける。その北東にある基壇状遺構が妙見堂か。この案では、男坂は斜面を直進する道となり、昭和 21 年の航空写真にも見える。山腹を斜上する女坂も同写真に見えるほか、現在も道を確認でき、絵馬「明神山七面参詣図」の表現とも整合する。ところで、天保 9 年（1838）「御巡見使御郡方役懸答書」は、七面宮の位置について「峠茶屋ゟ五福村迄拾五丁七面明神堂山之奥ニ社之有峠茶屋ゟ二丁斗坂ノ下タ鳥居ゟハ三丁斗」と記す。東斜面側の「坂ノ下タ鳥居ゟ三丁」（327m）は、案 1・2 いずれも合致するが、重要なのは西斜面側の「峠茶屋ゟ二丁」（218m）である。この起点について武内氏は峠茶屋村の入口とする（武内 2007b）。峠茶屋村の入口は、中茶屋村との境、現在村境の地蔵がある地点（呉羽山観光協会 2009）となろうが、ここから二丁だと案 1 の場合の七面宮はもとより、峠にすら達しない。このため起点は峠茶屋村の峠地点（現在の稲荷社に登る階段前付近）とみるべきであろう。この地点で北陸道から分岐して七面宮に向かう山道を二丁とみれば、案 2 の七面宮の位置はほぼ一致する。

いずれの案が実態に近いか、今後さらなる調査・研究が必要である。

4. おわりに

今回の発掘調査では、近世北陸道が呉羽丘陵を越える峠道という要所において、遺構が残存している





第 45 図　近世後期における明神山・五時谷の復元案

「礎石建物跡」「基壇状遺構」等の加筆した遺構は西井ほか 2018 による

ことがわかり、道路の変遷が明らかになった。また、地名どおりの峠の茶屋の存在を裏付ける多くの陶磁器も出土した。交通・文化面で近世富山の重要地点であった遺跡周辺における初めての発掘成果であり、その意義は大きい。調査の契機となった呉羽丘陵フットパス連絡橋の整備によって、遺跡周辺は今後訪れる人が増えることが予想される。江戸時代、富山の人々に親しまれ、多くの絵図にも描かれたこの場所は、呉羽丘陵のなかでも豊かな歴史遺産を有するメインスポットのひとつである。今後こうした歴史的環境を活かしていくことが重要であろう。

なお、本書の整理作業中、令和３年度呉羽地区文化祭で職藝学院が製作された七面堂模型が展示されることになり、筆者も展示準備委員会の一人に加えさせていただいた。職藝学院の上野幸夫先生、武内淑子氏、呉羽地区ふるさとづくり推進協議会や呉羽山観光協会の委員の方々との議論やご教示によって本稿にかかわる考えを深めることができた。また、古川知明氏からも有益なご教示を数多くいただいた。記して感謝申し上げる。

（野垣）

引用・参考文献

江戸遺跡研究会　2001『図説江戸考古学研究事典』柏書房
大島町教育委員会　2000『水上・本開発遺跡』
大野英子　2007『王塚・千坊山遺跡群』同成社
大橋康二　1994『古伊万里の文様』理工学社
九州近世陶磁学会　2000『九州陶磁の編年』
呉羽山観光協会　2009『旧北陸街道を歩く』
小柴直矩　1913『呉羽山』中田書店
新宿区内藤町遺跡調査会　1992『内藤町遺跡』
高瀬重雄監修　1994『富山県の地名』平凡社
武内淑子　2007a「呉羽山に埋もれた七面堂、宝塔、寺院等の建立地について」『富山市日本海文化研究所報』38号
武内淑子　2007b『呉羽山の七面堂』
谷口製瓦における瓦製作道具調査会　2015『谷口製瓦における瓦製作道具調査報告書』
津幡町教育委員会　2019『北国街道倶利伽羅峠道』
富山県教育委員会　1980『富山県歴史の道調査報告書－北陸街道－』
富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所　2014『小竹貝塚発掘調査報告』
富山市教育委員会　1976『富山市古沢・金屋地内古墳概要調査報告書』
富山市教育委員会　1984『富山市呉羽丘陵古墳分布調査報告書』
富山市教育委員会　1987『長岡杉林遺跡』
富山市教育委員会　1999『史跡北代遺跡ふるさと歴史の広場整備事業報告書』
富山市教育委員会　2000『向野池遺跡』
富山市教育委員会　2001『開ヶ丘中山Ⅳ遺跡発掘調査報告書』
富山市教育委員会　2003『長岡八町遺跡発掘調査報告書』
富山市教育委員会　2004a『北代加茂下Ⅲ遺跡発掘調査報告書』
富山市教育委員会　2004b『打出遺跡発掘調査報告書』
富山市教育委員会　2007『金屋南遺跡発掘調査報告書Ⅳ』
富山市教育委員会　2008a『八町Ⅱ遺跡発掘調査報告書』
富山市教育委員会　2008b『北押川Ｂ遺跡発掘調査報告書』
富山市教育委員会　2009『百塚住吉遺跡・百塚住吉Ｂ遺跡・百塚遺跡発掘調査報告書』
富山市教育委員会・富山市路面電車推進室　2009『富山城跡発掘調査報告書』
富山市教育委員会　2012『百塚遺跡発掘調査報告書』
富山市教育委員会　2015『八ヶ山Ａ遺跡発掘調査報告書』
富山市郷土博物館　2011『特別展 街道を歩く』
西井龍儀・藤田富士夫　1976「呉羽山丘陵の先土器・縄文時代草創期の遺跡について」『大境』６号　富山考古学会
西井龍儀・野垣好史・田上和彦　2018「呉羽丘陵明神山・五時谷付近の遺構調査」『論集富山城研究』2　富山城研究会
氷見市編纂委員会　2002『氷見市史』7　資料編５ 考古
兵庫埋蔵銭調査会　1996『日本出土銭総覧』
藤井昭二　1994「呉羽丘陵（地形・地質）」『富山大百科事典』北日本新聞社
藤井昭二　2000『大地の記憶－富山の自然史－』桂書房
婦中町教育委員会　1984『友坂遺跡調査報告書』
婦中町教育委員会　1993『友坂遺跡発掘調査報告Ⅱ』
婦中町教育委員会　2002『千坊山遺跡群試掘調査報告書』
古川知明　2012「近世北陸街道と呉羽丘陵」『富山市民大学 呉羽丘陵の考古学 資料』
古川知明　2018「七面堂周辺の題目塔群」『論集富山城研究』2　富山城研究会
古川知明　2020「呉羽丘陵峠茶屋山越道の検討」『論集富山城研究』3　富山城研究会
細辻嘉門　2010「弥生時代前期・中期の遺跡　富山市の遺跡」『大境』第28号　富山考古学会